

地域の子育て支援を考える会  
～けねべつ地域の取組～

報 告 書

日 時 令和2年2月4日(火)13:00～14:20

場 所 中標津町交流センター 大集会室

(中標津町計根別南1条東2丁目1番地1)

## 目 次

1	開催概要	.....	P	1
2	会場風景	.....	P	2～ 3
3	議 事 録			
	(1) 開会	.....	P	4
	(2) 挨拶	.....	P	4～ 5
	(3) 計根別地域における子育て支援の取組に関する報告	.....	P	5～ 8
	(4) パネルディスカッション	.....	P	9～21
	(5) 開会	.....	P	22
4	当日配布資料			
	(1) 計根別地区における子育て支援の取組			
	(2) 北海道酪農地域の農業者における出産・子育ての実態と地域支援のあり方			

## 1 開催概要

### (1) 目的

中標津町計根別地域で行われている、行政や農業協同組合、NPO法人などの団体の連携による子育て支援の取組について、広く管内に紹介し、地域の方々と子育て支援について考えることを目的として、次のとおり開催する。

### (2) 日時

令和2年(2020年)2月4日(火) 13:00~14:20

### (3) 場所

中標津町交流センター 大集会室(中標津町計根別南1条東2丁目1番地1)

### (4) 参加者

72名

### (5) 内容

ア 挨拶  
根室振興局長 大内 隆 寛  
中標津町長 西村 穰 氏

イ 計根別地域における子育て支援の取組に関する報告  
根室振興局 根室農業改良普及センター 北根室支所 専門主任 藤田 千賀子

ウ パネルディスカッション  
○コーディネーター  
根室振興局 根室農業改良普及センター 北根室支所 専門主任 藤田 千賀子

○パネラー  
酪農家(計根別地域) 中村 公美子 氏  
酪農家(計根別地域) 岡田 優子 氏  
計根別農業協同組合 営農部長 金野 智樹 氏  
NPO法人子育てサポートネットる・る・る 理事 松實 とよ実 氏  
中標津町 町民生活部 参事 高松 絵里子 氏  
十勝総合振興局 産業振興部 農務課 主任 峯 真里子

## 2 会場風景



取組報告①



取組報告②



取組報告③



パネルディスカッション①



パネルディスカッション②



パネルディスカッション③



パネラー（酪農家）中村 公美子 氏



パネラー（酪農家）岡田 優子 氏



パネラー（JAけねべつ）金野 智樹 氏



パネラー（NPO）松實 とよ実 氏



パネラー（中標津町）高松 絵里子 氏



パネラー（十勝総合振興局）峯 真里子



コーディネーター（根室振興局）藤田 千賀子



中標津町交流センター

### 3 議事録

#### (1) 開会（司会 社会福祉課長 藤田 和吉）

皆様、こんにちは。定刻となりましたので、只今より「地域の子育て支援を考える会～計根別地域の取組～」と題しまして、開会させていただきます。本日は、平日の日中の御多忙の中、多くの方々に御参加いただきまして、誠にありがとうございます。進行役を務めさせていただきます、根室振興局社会福祉課の藤田と言います。どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、主催者を代表いたしまして、北海道根室振興局長 大内 隆寛より、御挨拶申し上げます。

#### (2) 挨拶（根室振興局長 大内 隆寛）

手話を交えて御挨拶をします。皆さん、こんにちは。根室振興局長の大内です。よろしくお願いいたします。本日は雪が降って足元が不安な中、さらに御多忙中、「地域の子育て支援を考える会～計根別地域の取組～」にお集まりをいただきまして、誠にありがとうございます。振興局では、これまで安心して子育てできる環境整備に取り組んできたところではございますけれども、この計根別地区においては、NPO、農協、行政といった多くの関係者の連携によりまして、子育て支援の取組が進められているというところでございます。この取組については、私も30年以上、道職員をやっておりますけれども、全道で、こうした形で関係者の連携によって、政策が実現するという取組は、実は初めて体験をいたしました。

この取組については、実は、9月、鈴木知事より私どもの職員、北海道職員が、全道の最優秀賞ということで、表彰をいただきました。酪農家の方から、子育ての課題を聞き取り、それに応えてきたということで、鈴木知事は僕の横に座って、講評を述べたのですけれども、人事課が用意した資料を伏せて、自分の言葉で、職員を褒めてくれました。振興局長としても、非常に誇らしい思いでした。鈴木知事はこう言いました。「地域とともに考え、行動する道政の」、これは鈴木知事の公約ですけれども、「象徴的な事例であります。」と。たぶん最上級の言葉で褒めていただいたと思っています。更に、別な機会でも担当副知事の方から「計根別の取組は、地域連携の見本である。」ということをお願いいただき、「全道でもこういう農業改良普及員だけではなくて、行政の取組として、見本にさせていただきたい。」というようなことでございます。

取組に携わられました、町や団体の皆様、それから実際に子供の預かりを御利用されている保護者の方にも、本日は加わっていただきまして、パネルディスカッションを行っていただきたいと思っております。私自身も、大変楽しみにしてまいりました。御来場の皆様も、ぜひこの機会に、地域で取り組む子育て支援について、一緒に考えていただく機会になれば幸いです。どうぞよろしくお願いいたします。

(司会) 次に、計根別地域において実際に取組を進められた関係者を代表いたしまして、中標津町長 西村 穰 様より御挨拶をいただきます。

### (3) 挨拶（中標津町長 西村 穰 氏）

御紹介いただきました、西村でございます。今日は地域の取組の発表会ということで、計根別地域で行われた子育て支援ということでございます。今、大内局長の方から、大変お褒めのお言葉をいただきまして、ああ良いんだな、良かったなと思っておりました。計根別地域というのはなかなか面白い地域でございまして、計根別農協という、2つの町にまたがる農協があるというのが変わったところでございますし、その他にも農業高校では、指導員さんにも頑張ってください、色んな大会、全国大会にも出場するような高校となっております。その他にも計根別学園という、小中一貫の義務教育学校もあります。企業、それから小中高が連携した地域の取組というのは非常に盛んに行われる地域でございます。

そのようなこともありまして、今回保育所、その他の施設に関しましては、本当に色々な方々が「地域の課題をどう解決しようか」というようなことで、非常に熱心に話し合いをしていただきました。農協の職員さんも、参加していただきまして、ありがたいと思っております。そのようなことで、新規就農者の方々の子育て支援は、古くからこの地域で農業を営んでいる方は、おじいさんおばあさんがいたりしまして、子育てもある程度家族頼りであれば、できる可能性があったのかもしれませんが、残念ながらその新規就農者の方々は大抵2人でいらっしゃいますので、お子さんができても、なかなかその子育てをどう手伝っていくというの（問題）が非常に、結構ありますので、それを解決しようという取組をここで始めたというのがきっかけでございます。そういうことでは、非常にスピーディーに施設ができてますね、地域の課題の解決に繋がったということをおっしゃっていただき、見本であるというお褒めの言葉をいただきましたけれども、まさにそのとおりだと思います。

こういったことが酪農地域だけではなくて、他の地域にも広がるような取組になればというふうに思っております。今日はその取組の色々な関係者が集まって、お話いただけるということでありますので、勉強させていただきたいと思っておりますが、さらにですね、地域が盛り上がるように、中標津町としましても努力していきたいと思っておりますので、御協力の程、よろしく願いいたします。今日はどうぞよろしく願いいたします。

（司会）ありがとうございました。それでは、中標津町計根別地域における子育て支援の取組について、根室農業改良普及センター北根室支所 藤田千賀子専門主任により、取組内容について御紹介させていただきます。よろしく願いいたします。

### (4) 計根別地域における子育て支援の取組に関する報告

（根室振興局 根室農業改良普及センター 北根室支所 専門主任 藤田 千賀子）

根室農業改良普及センター北根室支所の藤田といいます。私の方から、取組の内容を説明させていただきます。農業改良普及センターというものは、振興局の出先機関になります。農業という名前が付いているとおおり、普段は農業者の方ですとか、農協さんを対象にお仕事をする人が多いで

す。ほとんどです。なぜ、それで農業に関わる人間が、子育て支援の取組をするかということから、背景から御説明したいと思います。

私は、平成28年にこちらに異動で参りました。計根別地区を担当することになりましたけれども、その時に計根別農協の営農部長さんの方から、「この地区で子育て支援に取り組みたい。」という話をされました。今までは、私は酪農の経営を担当していて、技術の話ですとか、農業経営の話というのが多かったのですが、子育て支援ということでありまして、何故かと言いますと、今、町長さんの方から御挨拶の中でお話しがありましたけれども、計根別地区というのは、道外からも、そして管外からも、新規参入者、新しく農業を始める方をたくさん受け入れています。実際に農業を始められている方が、既にたくさんいらっしゃる。その他にも、後継者の方、嫁いで来られる方というのは管外ですとか、道外出身という方がすごく増えていたり、結婚してからもお父さんお母さんと世代別に家を建てて、隣りで生活されていたりという方というのがすごく増えていました。特に新規参入者の方なんですけれども、そういった方が、仕事もそうですけれども、子育てを親に頼るのが難しいという状況にありました。普及センターでは、新規参入の方が多いということで、新規参入の方も、経営の安定、長期安定というところを課題化して、取り組んでいたのですが、私も仕事をする中で、やはり小さいお子さんがいる中での仕事というのは限界があるんだということは感じておりました。

それに対して、計根別地区の状況はどうだったかということなんですけれども、取組以前には、計根別市内の幼稚園というのは4歳になる年度から入園が可能であると。別海町にもまたがっておりますので、別海町側のへき地保育園というのは3歳から入所が可能という状況でした。中標津の市街地ですとか、別海の市街地とも、保育施設と格差があったと。そういう状況で、乳幼児、特に乳児ですとか、お母さんのおっぱいが離れた子とかの預かり（が可能な施設）がないという状況でした。そんな中、農家さんの中では、仕事でやはり子どもを見てくれる人がいない、子どもを放ったらかしにしておいて良いということはありませんので、子どもが心配で何回も見に行ってしまうとか、子どもの健康ですとか生命の危険を感じながら仕事を頑張っているという状況で、道外から来て、なかなか知り合いもない中で、相談相手がいないということもありまして、「こんなはずじゃなかったんだけどなあ。」という不安とか不満とか、そういう声もチラホラ聞こえていました。これは、農業の経営の方を仕事としている私達としても、生活の安定ができない、子どもを安心して預けられる場所がなくて生活の安定ができないということは、やはり営農にも影響があるんだということで、解決が急務であるというふう感じて、「まず、じゃあ検討を始めましょう。」という話になりました。

ただ、「検討を始めましょうか。」と言いましても、私たちは農業畑ですので、子育て支援の素人です。「まず、子育て支援ってどんな種類があるのか、ちょっと勉強しなくてはダメだね。」ということで、情報収集を平成28年から行いまして、農業に携わる農協さんとか、役場の農林課ですとか、あとは、うち（根室農業改良普及センター北根室支所）とで組織されている「北根室地区農業改良協議会」というのがあります。そこで、まずは視察研修、情報収集を行いました。視察先と



しては、足寄町の子どもセンター。こちらは保育ママさんなんかをやっているところで、そこで話を聞きに行ったのと、お隣の標津町で認定こども園ができていうことで、そちらに話を聞きに行ったのと、町内で色々な子育てサポートをされているということで、「NPO法人子育てサポートネットる・る・る」さんの方に、色々話を伺いに行きました。

次に実態調査。平成29年に行っています。こちらが「子育て支援したいな。」と思っても、向こうが「して欲しい。」と思っている支援って、別だったら困りますよね。なので、これはきちんと実態を把握しなくてはならないということで、「アンケートを取らなければいけないね。」という話をしていたんですけども、どうやっていったらいいかというのは正直悩みでした。そんな時に、当時の根室振興局の農務課から、政策研究大学院大学というところで1年間だけお勉強で出向している職員がおりましたので、その方がちょうどこのテーマを、「“酪農女性における出産と子育ての実態調査”をテーマとして、研究をしたいな。」と。なので、「実態調査をやりたいから協力してください。」という依頼が舞い込んできたんです。「これはもう、是非一緒にやりましょう。」ということで、実態調査を平成29年に行いました。写真が出ていますけれども、調査自体はこういうふうに対面式で行いまして、1件30分～1時間くらい、色々とお話を聞かせていただいています。そこには、農協さんと、私も一緒に行って、普段知っているような顔も見せながら、話やすい雰囲気というのを作りながら、一緒にやっています。

その実態調査の結果は、たくさんあるんですけども、簡単に紹介します。その農業者の方34名から回答を得まして、就学前と就学後、それぞれ困り事がありました。特に就学前、幼稚園に入る前の話をしますと、新規参入者の方では7割の方が“作業中に子どもを見てくれる人がいない”、ということで、全体では4割の方がそういうふうにお答えをされています。“作業中に子どもを見てくれる人がいない”と答えた方も、ほとんど、ずっと100%で危険な事例というのがありました。“お子さんが洗剤を間違っ飲んでしまった”ですとか、“牛舎に連れて行って、消石灰を消毒のために撒いたりするのですけれども、消石灰を触ってやけどをしてしまった”ですとか、“赤ちゃんを家に置いていたつもりだったけど、なぜか玄関からハイハイして出てきちゃった”だとか、“ベビーベッドの柵に挟まっていた”とか、“二重窓の間に挟まった”だとか、考えられない危険な事例というのがありました。

そんな中で、“就学前のお子さん、特に0歳から3歳のお子さんを、計根別地区で預かってもらう所があったら、利用したいですか？”というふうに聞くと、77%の方が“預けたいです”というふうに答えています。やはり、「これは支援が必要だな。」と思った結果でした。ただ、その支援をどうやってやっていこうか、ということで、先程の情報収集に関わったNPO法人るるるさんで当代表をなさっていた松實さんに、色々相談をしていたところ、「親子サロンをやってみるかい。」と。「まず、親御さんとお子さんが一緒に集える場所を作るってはどうだろう。」ということで、御提案をいただきまして、農協さんの2階の和室なんですけれども、(当時、)そこを活用して、「親子交流サロン」というのを月に1回ずつやっております。その時に、色々な子育ての困りごとの話を聞いたりですとか、そういうことをやっています。こちらにはですね、根室振興局の独自事

業（地域政策推進事業）がありましたので、そちらを活用しながら、開催をしています。これは、全部で8回、延べ26件の方が参加されたと。

これは親子で遊びに来られるような集いの場所なのですけれども、やはり求められているのは預かりの部分だということで、「ちょっとお試しでもいいから、何かやりたいよね。」という話をしていました。それはまた「るるる」さんに相談して、農協さんともお話をしたのですが、「じゃあ、出張託児を週に1回、お試しでやってみようか。」と。先程の和室を使って、出張託児を始めました。こちらにも週に1回「るるる」さんの方から保育士さんを派遣してもらって、開催したのですが、まずはお試しということで、平成29年度、30年の1月、2月、3月にやったのですが、「やはり、これは継続したい。」ということで、平成30年の4月からも継続してやっていただいています。通常、週1回なんですけれども、農繁期は、やはり酪農の場合はその収穫がある6月から9月がすごく忙しいということで、農繁期は無理を言って2回やってもらっています。合計70回、延べ330人のお子さんが利用しています。

次に、実態調査の結果がまとまったということで、また北根室地区農業改良協議会が主催となりまして、農業、酪農サイドの子育て担当の方、子育てサイドの方とかにも来ていただいて、「情報共有を図りましょう。」ということで、報告会を開催しています。この時には、それぞれ農協からも、役場の子育て方からも出席していただいて、色々な意見を出していただいております。ただ、これは平成30年の2月に開催しているのですが、この時には、実は中標津町の子育て支援室の方と計根別農協さんとで、「ちょっと協力して、子育て支援を何かできないかい。」という協議が、実は始まっていました。すごいスピードでこれから色々なことが行われていくのですが、詳しくは、後で、パネルディスカッションでお話しが聞けると思うのですが。

協議した結果、一時預かりと児童館、放課後児童クラブが一体となった「計根別こども館えみふる」が、平成31年4月に開設されております。農協の裏の方にある建物を、農協さんの方から御提供していただいて、町の方で改修工事を行って、こういうふうな右の方の写真は、一時預かりの様子なんですけれども、お子さんを本当にたくさん預かっていただいてまして、これは週に1度ではなく、平日は月曜日から金曜日、毎日9時から17時まで預かってもらって、正規の保育士さんをつけていると。もちろんスタートが（農業への）新規参入の方とか、農業者の方の支援ということもありますので、農協枠、農業者の方のお子さんですとか、農業に携わるヘルパーさんとか、農協職員の方とかのお子さんを農協枠として、月に何時間という縛りを持たないで特別枠ということで預かってもらっています。私の方からは、取組の内容について、以上になります。ありがとうございます。

(司会)ありがとうございます。続きまして、パネルディスカッションの方に移りたいと思います。パネラーの皆様は、どうぞ前の方のお席へ順次御移動いただきたいと思います。

## (5) パネルディスカッション

(司会) それでは、本日のパネラーを御紹介したいと思います。計根別地域の酪農家でいらっしゃいます、中村公美子様、そして岡田優子様、計根別農業協同組合営農部長でいらっしゃいます、金野智樹様、NPO法人子育てサポートネットる・る・るの前代表で、今は理事を務めていらっしゃいます、松實とよ実様、中標津町町民生活部参事でいらっしゃいます、高松絵里子様、現在、十勝総合振興局農務課に勤務し、当時は政策研究大学院大学で酪農地域における子育て支援について研究しておりました、峰真里子主任、この6名の皆様でございます。なお、コーディネーターは、今、取組を御紹介いただきました藤田専門主任に、この後の進行も含め、お願いしたいと思います。よろしく願いいたします。

(藤田専門主任) それでは引き続き、農業改良普及センターの藤田です。よろしく願いいたします。まず、緊張されている方もいらっしゃるかもしれないので、各自、簡単に自己紹介をしていただきたいと思います。中村さんの方から、お願いしてもよろしいですか。

(中村氏) 皆さん、こんにちは。私は、計根別地区の養老牛というところの、温泉の近くで牧場を営んでいる中村公美子と申します。今、家族構成は、主人と、子ども6人と私で、8名で生活しています。よろしく願いいたします。

(岡田氏) 皆さんこんにちは。平成26年9月に、西館地区に新規就農で入りまして、今年で7年目の年に入りました。岡田優子と申します。家族は夫と私と、小学校5年生、3年生、年少、あと2歳の双子、計5人の娘がおります。それと、今は双子が誕生するその年にちょうど定年を迎えた私の父が、千葉の方から手伝いに来てくれています。どうぞよろしく願いいたします。

(金野氏) 計根別農協の金野と言います。よろしく願いいたします。今日は、パワフルな女性の中、男1人ということですが、そのパワーに負けないようにディスカッションさせていただければと思っています、よろしく願いいたします。

(松實氏) 皆さんこんにちは。NPO法人子育てサポートネットる・る・るの松實と申します。現在年齢が63歳で、定年退職の時期になりましたので、去年から若い副代表の子に、代表を渡して、今は理事という立場でやらせてもらっています。どうぞよろしく願いいたします。

(高松氏) 役場町民生活部の高松と申します。参事ということになってはいますが、子育て支援室長を兼務しております、かなり長いこと、こちらの子育て支援関係には携わっております。よろしく願いいたします。

(峯主任) 十勝総合振興局農務課の峯と申します。よろしく申し上げます。私、平成28年まで根室振興局の農務課に在籍してまして、その翌年29年の時に、政策研究大学院大学というところに、1年間だけ行っていました。昨年からは十勝に戻ってきまして、また農務課として働いています。よろしく申し上げます。

(藤田専門主任) はい、ありがとうございます。今回の取組は、私が先程、御説明したのですけれども、色々な取組がありまして、皆さんそれぞれに関わっていただいておりますので、1つのテーマについて皆さんにお聞きするのではなくて、それぞれお話を聞いていきたいと思っております。まずは、1番最初のキーマンということで、JAけねべつの金野部長に、なぜ計根別で子育て支援を取り組もうと思ったかというところを、教えていただきたいと思っております。

(金野氏) トップバッター、御指名ありがとうございます。先程、藤田さんが説明いただいた、計根別地域における子育て支援の取組の冊子があると思うのですが、このページをめくっていただいて、ページ数、2ページというところがあると思うのですが、この真ん中に、「工作中、子どもを見てくれる人がいないんだ。子どもの健康、命の危険があるよ。」と。「相談する相手もいない。」と。「こんなはずではなかった。」と。

夢を抱いて新規就農の着地場所を計根別として、選んでいただいたんですけれども、このような状況になっているということは多々聞かされておりました。「これは自治体なり、行政の仕事じゃないのかな。」という考え方も当初していたんですけれども、「農協としても、受け身ではいられないな。」という部分が強く思うようになって、農協の執行者あたりにも、色々な意見を頭出しさせていただきながら、まだ何をやっていいのかも分かりませんでしたので、「たまたま、普及員の藤田さんが、計根別担当として赴任されたこのタイミングは逃せないな。」と思ひまして、相談としては、藤田さんの方にしながら、今に至っているというようなことであります。

(藤田専門主任) ありがとうございます。それでは、次に実態調査で余すところなく本音を語っていただいた、酪農家の岡田さんと中村さんに、農業に就農されてから、この取組が始まるまで、お二人はどんなふうにご子育てとか、お仕事をされていたか、という状況を教えていただければと思います。

(岡田氏) 夫の以前の仕事が、夜勤があったり、時間が不規則で、長女が生まれた後も、なかなか一緒に過ごすことができなかったのが、私は、「家族で一緒に過ごす時間が欲しい。子どもの成長と一緒に見守りたい。家族で頑張れる仕事がしたい。」とそんな思いから、夢と希望を持って、中標津に来ました。

が、実際に就農してみると、それは、子どもたちの夢や希望を奪ってしまうような毎日でした。当時、小学校1年生と年中さんと、生まれたばかりの赤ん坊を家に置いて、仕事に行っていました。

就農してすぐの頃は、何をするにも時間がかかってしまい、作業の全てを2人でこなさなければならなくて、一度の仕事で7～8時間かかることもしょっちゅうです。晩、仕事から帰ってきたときには、ひくひくと泣きつかれて眠ってしまった赤ん坊を抱えて、小学校1年生のお姉ちゃんが寝てしまっている。当然、お風呂にも入れてないですし、晩御飯も夕方握って置いていくおにぎりを自分たちで食べる毎日。そんな姿を目にして、「こんなはずじゃなかった。」と毎日、自分を責めました。

そして、三女がハイハイが上手になって、10箇月の頃ですね。留守番中に、洗濯の洗剤を飲んでしまって。幸い中性洗剤だったので、大事には至らなかったのですが、このままでは仕事どころではなくなってしまうと、町の託児所まで往復1時間近くかけて通うことにしました。朝晩の仕事に加えて、家事と送迎と、今考えてみれば、よく体がもったなっていう感じなんですけれども、それは安心して子どもを預けられるっていう、安全に見てもらえるっていうその安心感からだったのかなって思います。

お話にも何度もありましたけれども、やはり新規就農者の方は、私に限らず、頼れる身内がそばにいないことがほとんどです。ちょっと見ていて欲しいというその“ちょっと見てもらえる人”が、そばにいない。色々な所で相談するたびに、「子どもは泣かせておけば強くなるよ」という励ましの言葉をいただいたのですが、それが私には、とても辛かったです。実際に酪農に関わって、牛のために、と仕事をする、牛はもちろん返してくれるんですが、子供達にはその分寂しい思いをさせてしまう。逆に人間のため、と思って仕事をする、生活の糧である酪農が成り立たなくなってしまう。そのバランスが難しく、それは、今6年経ちましたけれども、その答えを今、探りながら、日々奮闘しているところであります。

(中村氏) 私は、岡田さんと違って既存の農家に嫁いだので、5人目までは主人の両親と同居していたので、子育てをしながら仕事はしなくて良かったのですが、5年前に主人の両親がリタイアをし、町の中に住んでしまったので、夫婦2人と、子ども5人を育てながら、酪農経営をやっていました。その中で、6人目ができ、お腹が大きい上に、従業員がいなかったものですから、全部お腹の大きいまま、主人と一緒に仕事をしていたんですけども、どこに頼って良いのかっていうのが、本当に分からなかったんですよ。今まで託児に預けたこととかもなかったですし、誰に助けを求めて良いのかっていうのが本当に分からなくて、何度か農協にも相談に行ったんですけども、農協の方でも、どういう手立てをしたら良いのかっていうことで、そのままヘルパーさんを使いながら、子供を出産することができたんですけども、結局、ヘルパー代も1日に2万円なので、1箇月で60万円、それが半年だと360万円っていうお金をどうやって出すのかっていう部分と、やっぱりいつまでもヘルパーさんを使うことができないので、私もすぐ子どもが生後1箇月も経たないうちからベビーカーに乗せ、泣けば背負いながら搾乳をしている毎日をしていました。子供達が学校休みの時には、子どもに赤ちゃんを預け、仕事をしている日々を送っていました。その中で、何が大事なのかなっていうところを、本当に生活していくために、岡田さんの言うように酪農経営はしてい

かなきゃいけないんですけども、忙しいと心に余裕がないので、子供にも叱ったり、主人にもイライラしたりっていう悪循環をずっと繰り返していたので、本当に、託児ができるまでは、辛くて苦しかったです。以上です。

(藤田専門主任)ありがとうございます。今日も色々と本音を語っていただきましたけれども、実際、対面で実態調査をした中で、十勝総合振興局の峯さんは、きっと色々を思うところですか、まとめたものがあると思いますので、ちょっと時間は限られるんですけども、この場でその一部を御紹介していただきたいと思います。よろしくをお願いします。

(峯主任)平成28年の時に、初めて岡田さんの話を聞いて、ちょっと私も何かやりたいなと思っていて、それで大学に行った時に、酪農家の子育てをテーマにして研究を始めたんですけども、その中で“実態調査をやるぞ”となった時に、その時は結婚もしてなかったですし、今もなんですけども子供もいない状態で、“お前が話を聞きに行って、何が、ちゃんと本音をもらえるのか”という不安がありましたし、(実際に)言われましたし。

その中で計根別地区の場合ですと、普及センターの藤田さんと、農協の金野部長と一緒にいくことができまして、それで、各農家さんの自宅を訪問してヒアリングしまして、子育てのことも分かって酪農にも詳しい藤田さんがお話を広げてくれて、また、金野部長の方でも農家さんの人柄を把握されていて、話しやすい雰囲気を作っていただいたおかげで、色んな話を集めることができ、この調査をまとめることができました。本当に助かりました。

実態調査の内容を紹介したいんですけども、カラーの両面で印刷しています。「北海道酪農地域の農業者における出産・子育ての実態と地域支援のあり方」のところをかいつまんでお話ししたいと思います。資料右下のところに、1、2、3、4とスライドの番号が振っておりまして、最初にそのスライドの11のところを開いていただきたいです。「道東事例調査回答者属性」というので、計根別の農家さんについては、34名の方から、メインはヒアリングで、一部の方はアンケートで回答いただきました。大きく分けて3つなんですけれども、新規参入者の方、岡田さんみたいな御夫婦お二人で入って来られる方、また、後継者に嫁がれた方、また、家業であった方、というので、分けて記載しています。新規参入者の方の特徴としまして、8割が道外出身者で、全員が両親と同居していない状況です。また、乳児がいる割合が高いというのが特徴としてあります。また、後継者に嫁いだ方についても、両親と敷地内別居している割合が高く、労働者数、所得数が多いという特徴がありました。

次に、スライドの12を見ていただきまして、「出産前後の実態」について調べたんですけども、出産前後ともに作業時間が8時間から10時間と、比較的長く労働されていました。お休みについては、産前は出産1週間前から休み、産後は1ヶ月以内に復帰している割合が、全体の4割を占めていて、休暇期間も短いというのが分かりました。この長時間労働と、短い休暇の影響としまして、体調不良等身体的な負担があつて、“お腹が大きい中、しゃがんで作業すると腰に負担

がかかって辛かった”という話や、“産後は体力が戻らない中、作業をしてフラフラだった”という意見がありました。また、1件だけ流産という回答もありました。

そして、休みにくい状況になっている原因としまして、“家族の目が気になる”という意見がありました。上の世代の方のほうが、“出産当日まで働いていた”という回答があったことから、世代間の違いが考えられまして、例えば、義理のお母さんに、「私の時はこれだけ大変だったのよ。」と言われると、お嫁さんの方も「じゃあ、自分も我慢して働かなくてはいけないかな。」という意識になって、自然と若い世代にも同じ負担を強いているような環境になってしまっているのではないかと考えられました。

そして、スライド13にいきまして、「子育ての実態」なんですけれども、先程、藤田さんの方からお話があったのですけれども、作業中に牛舎に子どもを連れて自分で見たり、家に置いたりした割合を見たところ、全体で4割、新規参入者については6割という結果になりました。そして、事故に繋がるような事例も発生してまして、洗剤の誤飲だったり、柵に挟まっていたりということがありました。この危険な事例については新規参入者だけじゃなく、後継者の世帯でも発生していました。

次にいきます。スライドの14にいきまして、ここの吹き出しのところが変わっているだけなのですけれども、お母さん達にとっても、“子どもを置いていくのが心配で、何度も家に様子を確認しに行ったり”だとか、“作業に集中できないような状況”があり、“子どもが泣いている中、放置して作業をするということがストレス”ということもおっしゃっていました。

スライド15にいきまして、「出産前後の相談相手・考え方」というところなのですけれども、“出産前後における相談相手は、1番は家族に相談している”ということがあったんですけれども、次いで多かったのが、“周囲に相談したくてもできない、しにくい”というのがありまして、“子供を放置していることを保健師に相談できなかった”、“周囲で早く仕事に復帰した話を聞くと、相談できなかった”ということがありました。また、「義父母などの周囲の目が気になって働かなくてはいけない。」と言っていた人もいました。他にも、「就農したら最初はヘルパーを雇えないから、子供は産めない」と研修先で言われた。」ということも聞きました。

そして、スライド17の方にいきまして、先程は実態の話を書きまして、今後、どういう困り事が、どういう希望、支援要望がありますか、というところを聞いたところ、一番多かったのが、0歳から3歳未満の預かりで、次いで多かったのが、小学生から高校生の送迎でした。これらの困り事の共通点として2つありまして、1つ目が長距離の送迎、そして搾乳時間と送迎が重なるという実態でして、先程のお話にもありましたけれども、市街地の送迎に往復40分～1時間かかるという方が6割、そして送迎している方は回答者御本人というのでも6割ありまして、子供を預けるのも、部活へ連れていくのも女性ということで、女性の方に負担がいつているような状況でした。

そして、スライド18のところ、預かりの支援のところ、金額いくらだったらいいのか、どのくらいの時間帯だったらいいのか、というのを聞いてみたところ、一番多かったのが、時間帯は夕方の搾乳時間、料金はいくらでもいいから預かってほしい、と。その中で計根別地区に託児所が

あったら利用したいかという質問を設けたところ、約8割の方から「預けたい」という回答をいただきました。預かり・送迎以外の支援希望として、「気軽に相談・交流できる場がほしい」というのがありまして、「行き詰まった時に相談したい」、「母親同士交流できる場所がない」という意見がありました。一部なのですけれども、調査結果について御紹介いたしました。この資料に、調査の一例を載せていますので、お時間ある時に、お読みいただければと思います。

最後に2点お話したいのですけれども、子育て経験がない自分でも、この調査をすることができたのは、今いる藤田さん、金野部長、高松参事、そして松實さんがいて、調査ができました。本当に感謝しております。

ただ、この反面、研究を進めている間に、大学の方でも、北海道内のほかの地域で調査しようと思っても、なかなか厳しい意見が多くて、「こんなのをやっても農業のためにならないだろう。」、「家庭の問題だろう。」というの也被われまして、自分もこのまま研究を進めていいのものかなというのを考え、悩んでいた時がありまして、ただ、やっぱり命に関わること、健康に関わることを、公務員としてやることは間違っていないんじゃないかというような、ちょっと開き直ったこともありまして、「岡田さんの話を聞いて、自分がこの問題を無視して、岡田さんがいなくなったら、ちょっと後悔するな。」と思ったので、それで「これでいいんだ。」と思って、自分に言い聞かせて、やっていました。

その時に思ったのが、たぶん、生産者の方も、「子供を放置するんだ。」って周りから言われた時に、「この人達に言っても意味がないんじゃないか。」と、「理解してもらえないんじゃないか。」と、「困っていることを言うことすら諦めてしまうのではないか。」と思ひまして、「まずは相談できる雰囲気作りというのが大事なのかな。」と思ひます。特に自分を含めた関係者の方が無関心でいること、また、批判的な発言をすることのないように変わっていただければと願ひまして、この計根別の取組が、全道、全国に広がるように、皆さん知っていただけたらなと思ひております。すみません、長く。ありがとうございました。

(藤田専門主任) ありがとうございます。研究を進める中でも、色々と辛い思いをしながら、ここまでまとめていただいて、皆でこの情報が共有できたというのは、とても貴重だと思ひます。ありがとうございます。

次に、「るるる」の前代表の松實さんにも、お伺ひしたいんですけども、「るるる」では色々な子育て支援の事業を行われています。今回は、「出張託児」と、「親子サロン」ということで、計根別まで来ていただいて、週に1度、2度ではありますけれども、悪天候の中も来ていただきながら、子育て支援をしていただきました。その経験と、今まで「るるる」で色々な事業を行ってきた経験から、市街地からこういうふうにならなくなった地域での、子育て支援の難しさですとか、これから根室管内で、どのような子育て支援が必要になってくるとお考えか、教えていただきたいと思ひます。よろしくお願ひします。



(松實氏) まず、藤田さんと、峯さんと、岡田さんと、中村さんと、これから私達の次を担う女性達が、こうやって熱意を持って、こういう所で発表されていることに、心から敬意を表しております。

私も実は、平成15年に「子育てコミュニケーションスペースるるる」をオープンした時、最初に親子サロンをやりました。そこに集ってくるお母さん達の中に、関西から酪農家のお嫁さんとして来ている方達がおりました。御実家が遠く、地縁がないということもあって、中にはお友達も中々できなかった方もいたようです。親子サロンで「大阪弁を話す会」というのが自然発生的にできて、月に1回、2回の会でしたが、「みんなで大阪弁が喋られるから。」と言って、楽しそうにその会に集って来られる方達がいらっしやった。それから、もう20年経っておりますが、今でも時々お会いしますが、元気にしてくださる姿なんかを見ていて、「ああ良かったな。」と、お母さん達にはこういう寄り場が要ると実感しています。

平成27年から、隣りにいらっしやいます高松室長から、「是非、るるるの方でファミリーサポート事業と、一時預かり事業の委託を受けてくれないか。」というお話がありまして、お受けすることになり、平成27年から、ファミリーサポート事業と一時預かり事業を行っております。

私達も初めてでしたので、事業を始めるに当たり、色んな所を調査したり、お母さん達はどんなサポートが欲しいのか尋ねたりしました。ファミリーサポートというのは、町民の方達がボランティアとして、相互に助け合う事業です。利用会員は、「困っている。」「支援をして欲しい。」と、私達のところへいらっしやいます。提供会員は、一時間の最賃(最低賃金)以下の報酬はいただきますが、その時間を提供して、子育て中の御家庭の手助けをする。私達は両者をコーディネートし、それをつなげる。それがファミリーサポート事業なんです。この町では、「一時預かり」の依頼もあるのですが、「移送」(子供達の送迎)というのが非常に多かったです。

その中で、郡部のお子さんのケースなんです。町内でへき地の学校が統合になって、市街の方に来ており、例えば、開陽(地区)なんかですと、開陽から中標津(市街)の丸山小学校に来ているのですが、お子さんが部活動をしたり地域でスポーツ少年団に入ったりしていて、放課後の帰宅時間が結構遅くなるんです。下のお子さんがいたりすると、あそこの場合は俣落(地区)の保育園になるんです。両親とも、ちょうど夕方の忙しい時間帯に、お母さんは俣落の保育園に子供を迎えに行き、また今度は町内(市街)に入ってきて、子どもの放課後の迎えに行っている。こういう状況があって、「とっても大変なんです。」っていうことで、「るるる」に駆け込んでいらっしやって、その支援をすることになりました。そこのお宅の支援をする中で、町内(市街)よりも郡部の方達は送り迎えに時間がかかるし、新規就農の家庭は本当に大変なのだと分かりました。すごくそこは思っていました。

28年度の利用状況の結果から、室長とも、「郡部に関しては何かを考えなきゃいけないね。」という話をしていました。そんな中、藤田さんが「るるる」に来てくださりまして、新規就農の御家庭の子育て支援についてのお話しをお聞きした訳です。「じゃあ、何か始めましょう。」ということで、早速、藤田さんと金野部長にお会いして、金野部長の方も、「是非、一緒にやりましょう」と言ってくださったので、親子サロンから始めた、という感じです。サロンではお母さん達に集まっ

てもらい、現状をお聞きし、週1回の一時預かりをお受けした訳です。

私、その時に、このことに関わらせてもらって、すごく思ったことがあります。それは、その地域によって、状況が非常に違うのではないかということです。例えば、一次産業の現場では、お母さん達の働く時間に差があるので、一時預かりと言うのであれば、その状況に合わせて使いやすいように工夫する必要がある。それは、先ほど藤田さんの発表の中にもありましたが、酪農家の地帯であれば、夕方の採乳の時間が忙しいとか、6月から7月の草の時期が忙しいとか、今、分業されてきていますけれども、新規就農者の方達だとかは、結構自分たちで小規模酪農という形でやられようとする家庭もあるというふうにお聞きしておりますし、そういう意味で言えば、その地域、地域によってどういう支援をするかということが非常に大事に思います。

あとは、子育て支援ということが、やっぱり大事なお子さんをみるので、どんな人でも良いから預けるということには、なかなかならないんですよ。大事なお子さんですから、やっぱり子供がどういうふうにご過ごすことができるのかっていうことを、やっぱりみんなで大事に考えてあげなきゃならないので、みる側も、皆さんで協議する場とともに、研修をしていく必要性がすごくあるんじゃないかなと思っています。

それと、根室管内でという話も先程ありましたので、私は今、標津の方に関わってきてるんですけど、やっぱり、漁村地区は漁村地区のお母さん達の動き方も、タイムスケジュールっていうのが全然違うので、その辺もしっかり調査してあげて、お話を聞いてあげたらいいなっていうふうに思います。

私が引退したのは、だんだん若いお母さん達との価値観が大きく違うことを実感してきたことがあります。時代が変わり社会機構自体も大きく変化し、私が子育てしていた時とは違います。お子さんを育てる上で、ただ早いうちから預ければいいのかということではなく、やっぱりお母さんと子どもと、御家族、地域の人達で1つのファミリーと考えて、研修していくとか、お互い話を聞いてあげるとか、そこでどう考えていったらいいのかって、みんなで考える場が必要です。そういう機会がやっぱり私はあったら、本当に痒い所に手が届く支援ができるのではないかなというふうに、私は思っております。

(藤田専門主任) ありがとうございます。地域、地域で抱えている問題っていうのは違うと思いますので、計根別は今回取組として報告はさせていただいてますけども、一つの事例として、今日お集まりの皆さんに他の地域ではどうなのだろうということの考えるきっかけになったら良いなと思います。ありがとうございます。

次にですね、中標津町役場の高松参事の方に、計根別地区ではその中で「一時預かり」という形が取られています。なぜ、計根別地区では「一時預かり」という形をとったのかということと、今日は農業畑の人も来ていらっしゃると思いますので、“一時預かりって何なんだ”っていうのが分からない人もいますので、“一時預かりって何なのか”、“計根別の一時預かりはどういうふうになされているのか”っていうのを紹介してください。お願いします。

(高松氏) はい。一時預かりなんですけども、言葉のとおり、日中、「(計根別こども館) えみふる」で行ってございまして、9時から5時まで、月曜日から金曜日までお子さんをお預かりしております。定員は10人なんですけども、そのうち6名が農協枠ということで、扱っているのですけれども、実はこの一時預かりをなぜ行ってたか、本当だと皆さんが希望していたのは保育所、認定こども園という形の保育所を希望されていたんじゃないのかなと思います。3歳以上を預かるるところというのは、計根別幼稚園では存在してるんですけれども、計根別地域につきましては、3歳未満のお子さんを預かる施設がなかったということで、どういう形にもっていったらいいのかなってというのは子育て支援室の課題でもあったところです。

ちょっと、成り立ちを説明したいと思っておりますけれども、峯さんの資料を持って、金野さんと藤田さんが、私のところへ、“計根別でこういうことをやりたいんだけど、どんなことをしたらいいんだ”って来た時のことは、すごく覚えています。その中で、どのような形がいいのかなって、時間帯だったんですけれども、やっぱり酪農家の時間帯っていうのは、普通の時間とやっぱり違って、本当に預かって欲しい時間帯、この時間帯ではなかったんですね。当初、話した時に、「7時からいまで預かって欲しい。」だとか、「早朝預かって欲しい。」とかっていう話を、金野さんとした時に、「すごくハードルが高いな。」って、すごく思いました。「行政でできるのかな。」っていうふうには感じたのですけども。

ただ、私の気持ちとしては、子育てを支援する、子供を預かる、子供を預かってる時には、本当に安心して働けるような体制を作って欲しいんです。ただ、保育を7時までやっちゃえたら、子供の就寝の時間とかも本当にずれ込んでいってしまって、子どもの育ちが保証できなくなったとしたら、やはり、子育て全体を、お母さん方というのは7時まで働いて、それからまた家のことをやったら、過重労働になってしまう。そうさせないためにも、やっぱり農協さんの方で、農家さんにつながっているのであれば、子育てをサポートするより、お母さん方が子育てをしやすい環境をサポートしてあげられるような時間帯を保証してあげるように、しっかりとする必要がないでしょうかということで、散々攻めたことがあります。

本当にお母さんたちが、どんどん無理しちゃうんですね。(預かる時間を) 延ばしたら延ばしたで、それから家のことをやって、そしてまた、子どもを寝かしつけて、そしてまた、預かってもらってる時間みっちり仕事をする。「そういう体制の支援というのは、したくないんです。」ってことで、藤田さんと私と、金野部長をすごく攻めたことがあります。そしたら、今野部長の方が「いや、そんなふうな考えは持ち合わせてなかった」と。「そういうような農家さん、それから男性の意思改革も必要なのかもしれないね。」というところから、この話はトントントントとスタートしたのかなというふうに思っています。「旧NOSA I (農業共済組合)の施設が空いているんだよね。」ってということで、金野さんに紹介していただきまして、その日のうちに見に行きまして、「ここなら使えるかもしれないね。」ってということで、そこから始まったことかなと思っております。

「一時預かり」なんですけども、託児所、保育所をもっていけないことはなかったんですけども、やはりこれは農家さんのための支援というのもありましたし、新規就農者のための支援ということ

もありまして、計根別地域っていうのは独特な地域で、中標津町だけではないんですね。(計根別農協の) 組合員さんが別海町と中標津町にまたがっていることで、今の子ども子育て支援制度の保育所の仕組みでは、(中標津町) 計根別(側)のお子さんしかお預かりできない仕組みになってしまうのです。そういうこともありまして、計根別に所属する組合員の皆様が、やはり利用していただくためには、託児所、認可保育施設という形ではなくて、「一時預かり」ということで、使っていただくのがベストではないかなということ、あえて「一時預かり」にさせていただいたということにしています。

(「えみふる」における)「一時預かり」なんですけども、今、本当に、お陰様でと言いますか、一日10人をちょっと超す、定員が10人とうたっているんですけども、10人を超す日もありまして、もう既に(延べ利用者数が)1000人を超えているような状況になっております。かなり毎日のように来てくださっている方もいて、嬉しい悲鳴をあげています。何よりも嬉しいのは、お母さん達が来たあと、児童館が6時までなんですね。託児所は5時までなんですけども、6時まで児童館やっていますので、そしたら今度、児童館に寄って、先生とお喋りして帰っていったら。そういうような交流もできている場になっているのかなというふうに思っています。以上です。

(藤田専門主任) ありがとうございます。今のお話の中で、高松参事の方から、「預かりの時間を長くしてしまえば、それだけ仕事の時間が増えてしまうのではないか。」と。これは、農業に関わるサイドとしては、やはり考えなくてはならないことだなと、私も改めて、この時に思いました。「一生懸命仕事をして欲しい。」という思いもありますが、そうすることで、結果的に農家の方を、お母さんたちを追い詰めてしまうということもありますので、この話は、ちょっと皆さん、今一度、農業に関わる人間というのは、考える必要があるのかなと思います。ありがとうございます。

次にまた、金野部長の方にお聞きしたいのですけれども、農協さんが場所の提供だけではなくて、始まってからも色々御支援をいただいていますので、「えみふる」の一時預かりに対する農協さんの支援内容を教えてください。

(金野氏) はい。支援内容ですね。先程、藤田さんの報告の中に、定員10人なんですけど農協枠が6人分ありますと説明があったと思いますが、これは何かというと、農協枠を受けられる対象者は、農業者の方は、当然うちの組合員の方と限定させていただいていますが、その農業者の方、家族、そしてその組合員のところで働く方の御家族も対象、もちろん、うちの農協の職員も対象、JAけねべつ管内に住んでいる獣医さん、まあNOSA Iが主ですけども、その職員の方の家族もその枠に入れさせていただいて。あと、中標津町の農業高校も農業に関わってもらっていますので、その教職員の方、家族も対象と。JAけねべつ管内に事務所を置く農業関連会社、例えば、TMRセンターだとか、コントラクターだとか、そういったところで働く方の家族も対象にしていますよというように、お金の助成をさせていただいています。

託児の料金として、4時間以上で3000なんぼとあってあるのですが、4時間以上の場合の助

成が1000円で、4時間未満が500円というようなことで、お金の支援をさせていただいているのが、まず一つ。それと、高松さんと色々仕事を組み立てていく中で、やはり農協枠が欲しいんだと言ったところ、一つ条件として、保育のスタッフの方の人件費、1人300万円1年間上限として考えまして、農協枠で託児料が当然収入として全部入りますけれども、この300万円に達しない場合、農協枠の託児料が300万円に達しない場合は、農協が補填しますよというようなことで、言い方が良いか分かりませんが、差別化させていただいた中で、一般の町民の方にも理解を得ていただくような、そういう仕組みも相談して作らせていただいたようなことであります。

今、「えみふる」のことを言いましたけれども、その手前の部分（JAでお試し一時預かりをやっていた期間）で言うと、出張託児を松實さんのところでやっていた部分も、備品の関係から託児料の関係も全額ではないですが、一年半くらいに渡って約100万弱、70～80万あったかと思いますが、その辺のことは農協で負担しながら、組合員の生活を何とか支えたいというところで、やってきております。今後も、その辺のことは続けていきたいかなと個人的には思っております。

(藤田専門主任) ありがとうございます。実際こうして、色んな出張託児ですとか、「えみふる」による一時預かりが始まりました。今、前に座っていただいています、中村さん、岡田さんのお子さんも、実際に預かってもらってるところなんですけれど、こういう取組が始まってから、お子さんを預けるようになってから、お二人の働き方とか、生活に何か変化があったかということをお聞かせ願いたいと思います。中村さんからお願いします。

(中村氏) まず第一に、自分に余裕ができて、家庭内での笑顔が増えたと子供に言われました。今までは、下の子がいた中で、獣医さんをみたり、人工を見たりっていうことで、本当にハラハラしながら、仕事に集中はできない、家の中で家事をやりたくても、「魔の3歳児」と言われる暴れん坊がいるので、なかなか家事も進まない状況の中で、毎日毎日やってきたんですけれども、託児に預けるようになってからは、オン・オフをはっきりさせられるようになりました。

最初は、後ろ髪を引かれる思いで、一番下の子だったので、ものすごく可愛かったですし、逆に預けてしまうことに、罪を最初はちょっと感じてた部分もあったんですけども、日に日に子どもが成長していく姿と、自分が子どもがいない間に、何ができるのかっていうのを頭の中で整理ができるようになりました。

そして、主人とも、日中の作業を一緒にやるほかに、(作業が)ない時には、思い切って家を出て、近場なんですけども、昼食を食べながら、違った環境で、今後の仕事の話とかも効率よくできるようになりました。

本当に、こうやって松實さんの親子サロンきっかけに、行政が関わってくれて、計根別に託児ができた訳なんですけども、今、私が考えていることは、自分たちの世代だけではなくて、これから農業を新規でやりたいとか、子育て世代の若いお母さんたちが困らないようにするためには、どう

していったらいいのか、それと、やっぱりここで終わらない。「昔はこうだった。」とかではなくて、これからどうするべきなのかというのを、地域全体で、みんなで考えられるようにしていきたいと思えるようになりました。本当にありがとうございます。

(岡田氏) 昔の話をすると、ついつい涙が出てしまって、私こういう場で話す機会を何度かいただいているので、今回は絶対に泣かないようにと心に決めてきたのですけれども、お見苦しい姿を見せてしまい、申し訳ありません。

今、3人目までは、なかったんですけれども、自分が4人兄弟ということもあって、どうしても4番目がほしいと、強く思って4番目を作ったら、まさかの双子ということで、正直、喜べるというよりも、不安の方が大きくて、どうしようという気持ちだったんですけれども、おかげさまで、「えみふる」を作っていただいて、側に子育てに関して相談できる仲間もたくさんできて、毎日、私も笑顔でいられるようになりました。

新規就農で入ってくる方は、今後もいらっしゃると思うんですけども、本当に心から「ここに来て良かった。」と思ってもらえるように、私も微力ながら、お手伝いできることがあれば、今後もしていこうと思っています。本当に関係機関の方々に、心より感謝申し上げます。ありがとうございます。

(藤田専門主任) お二人とも笑顔が増えたということで、やっぱり家の中でお母さんが笑顔でいることって、すごく大事だなと思うんですよね。そういう笑顔の機会が増えたっていうのは、関わった人間の1人として、すごく嬉しく思います。ありがとうございます。

次に、最後の質問になりますけれども、高松参事の方に、これから中標津町ですとか、計根別地区で予定されているような子育て支援の今後の広まりとかがありましたら、教えていただきたいと思います。

(高松氏) はい。やはり限られた時間の中で、お預かりをさせていただいているんですけども、先程松實さんからも話がありましたけれど、それ以外の時間帯、どうしてもっていう時の体制っていうのは、これから地域の中の支援体制をどう構築していくかっていうのは、一つ大きな課題になってくるのかなっていうふうに思っています。ファミリーサポートセンター事業もありますので、まだ、計根別の方には会員になってくださる方が、ちょっと少ないような状況もありますので、こういう拠点をきっかけとして、ファミリーサポートセンター事業に興味をもって、その地域間の援助活動ができるようになれば良いのかなっていうふうに思っております。

「えみふる」につきましても、国庫補助の方を利用させていただいたんですけども、古い建物、本当でしたら、計根別地域の方につきましては、新しい建物を建てていただいた中でというふうに期待されていたのではないかと思います。今回このような形を取らせていただいたんです。計根別幼稚園の方もありますし、まだ耐用年数とかもありますので、今後、「えみふる」、それから計根

別幼稚園を一体化させたような、そういうような展開も考えていかないとならないのかなというふうに考えております。本来の希望されている形は託児所ってということもあると思いますので、その辺のことを視野に入れながら、これからの人口動向を見ながら、計根別地域にとって、どういうあり方が良いのかなっていうことを、また、やはり地域の皆様方と一緒に御相談させていただいたり、考えていけるような、こういう場をもっていけたらなっていうふうに考えております。以上です。

(藤田専門主任) はい。ありがとうございます。こちらのパネルディスカッションの方で予定していた内容は以上となりますけども、会場の皆さんの方から、何か御質問があれば、お受けしたいと思います。よろしくお願ひします。よろしいですか。

(質問者) 1点だけ教えてください。一時預かりの、下の、預かる年齢は何歳何箇月からというふうになるんでしょうか。

(高松氏) 9箇月からです。

(質問者) 9箇月ですね。分かりました。

(藤田専門主任) 他にございませんか。よろしいでしょうか。それでは、御質問がないようですので、パネルディスカッションをこれで終わりたいと思いますけども、今回、私も最初に取り組の御説明からさせていただきましたが、こうやって農業、酪農分野だけではなく、子育ての分野の方達とも、協力をし合いながら、一連の取組ができたというのは、私自身、道職員としてとても勉強になりました。

行政のほうは、どうしても自分の課の仕事に集中することが第一なんですけども、集中してしまっって、他と協力するということが中々少ないと思うのですけども、今回、私がこうやって一緒にやらせていただいて、こうやって本気で一つのことに違う分野の人間が取り組むと、こんなふうに事が運ぶんだなと。無理だと言われていたことができるようになるんだっていうのを、身をもって感じました。今日、色んな方がお集まりいただいて、大変嬉しい限りなんですけど、これから私達、道職員も含めて、子育て支援ですとか、地域の課題に取り組む時に、自分の課だけではなく、協力できる他の分野はないかということも考えながら、仕事ができいくと、地域の課題解決に、よりスピーディーにつながるんじゃないかと思っております。

今日は皆さん本当どうもありがとうございます。最後に、色々とキーマンとなった方々、本音を語っていただいた方々、皆さんに、拍手をもってパネルディスカッションを終わりたいと思います。どうも皆さんありがとうございました。

## (6) 閉 会

(司会) 改めまして、パネラーの皆様どうもありがとうございました。それでは、これもちまして、「地域の子育て支援を考える会～計根別地域の取組～」を閉会といたします。どうもありがとうございました。どうぞ、お帰りの際は冬道での運転など、十分御注意いただきまして、お気を付けてお帰りいただければと思います。どうもありがとうございました。